《修士論文要旨》

碇から考える水中考古学

水　野　恵利子*

水中考古学は目新しい学問ではない。しかし、日本において学術的成果を修めた調査は数少ない。むしろ考古学としてではなく、“宝探し”のニュアンスで捉えられている。四方を海に囲まれた島国であるのに、海に対しての関心が究めて薄い。日本ほど考古学への関心が高く、また技術をもちながら、歴史探求の目を海に向けないのは一体なぜであろうか？

この論文ではイカリをテーマに、これまで出土している碇石に関して考察する。碇石の出土数が一番多いのは、地中海であり、その形状から改良の過程を見出すことができ、石でできたイカリから、銅を重りにしたイカリ、そして現在でも見られる四つ爪の錨への移行が時代とともにみてとれる。しかしアジアにおいては、イカリ自体の出土数が少なく、また研究者も少ない。アジアの水中考古学は、ようやくスタートし始めたばかりである。最近、韓国では国を挙げて水中調査が行われ、沈船が引き揚げられた。船内から“東福寺”と墨書きされた木簡が出土し、日本へ向かう貿易船であったことがわかった。

イカリは船を係留するための船具で、どんな船にも必ず装備される。今日の船舶は、鋳造されたアンカーを使用してが、昔は木・石でできたイカリを使っていた。イカリを表す漢字として、「碇」、「椗」、「錨」などが挙げられるが、「錨」は金属製のもの、「碇」は石製、「椗」は俗語らしいが木製のイカリを表す。この論文で扱うのは、「碇」と「椗」である。

九州一帯からは、大型の定形化された碇石が出土している。特に博多湾や五島列島からの出土が多い。軸装着部と固定軸をもち、木に汲まれて使用されたもので角柱型と総称される。この碇石は、これまで元寇のものであるとされていたが、1994年に長崎県鷹島での新発見により、その年代について新たな見解が求められる。鷹島は元寇由来の史跡が多く残る、伊万里湾に浮かぶ小さな島である。この沖合でも、角柱型が出土していたが、すべて折半していた。

1994年、シルト層の中から、木製の軸の両端に椗石が取り付けられたイカリが出土し、これらが角柱型とは異なるタイプの椗石であることが判明した。木と石でつくられるイカリの木製部分が出土したのは鷹島が初めてであり、大変貴重な発見であった。この二石分離型椗石も元寇のものであるなら、なぜ鷹島には二石分離型が、博多湾・五島列島その他の地域には、角柱型が出土するのだろうか？また、両者の違いは一体何を意味するのだろうか？当時の海事史・社会背景を考慮しながら、これらの疑問について考察をする。

角柱型・二石分離型の他にも、椗石は存在する。主に不定形で、その使用年代などは特定することが困難である。石を重りとするイカリは、近世でも漁村などで使用されており、鉄が普及したからといって、石のイカリが淘汰されたわけではない。静岡県熱海市沖にて、実際に碇石の分

平成17年度　*文学研究科文化財史料学専攻

布調査を行い、また広島県宇治島沖の沈船いろは丸調査の際に出土した碇石についても触れる。この二つについては、一般には報告されていない。民俗例を参考にしながら考察を行いたい。